



TITLE:

海外日誌(三十)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(三十). 天界 1925, 5(57): 385-388

ISSUE DATE:

1925-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160299>

RIGHT:

海外日誌 (三十)

文部省在外研究員 山本一清

大正十三年十二月七日(日)

十時にウトレヒトを立つて、十一時に國都ハーグ着。ホテル・ベルギユに室を取つて置いて、日曜の一日を市内見物に費した。パザリヨン街にスビーノワの像を見、メスダク美術館ではミレーの「死別」など、又「マウリトハイス館でレムブランドの「解剖教室」などを見、又有名な平和宮を見たことは、いつまでも忘れられないだらう。——オランダとしては、ハーグは、やはり、美しい町で、色んなものが整頓した、高尚な感じを與へる。殊に廣いホシ公園の靜かな夕景は好かつた。

十二月八日(月)

朝ハーグ南停車場を立つて、十時ライデン着。可なり深い霧の中を歩いて天文臺を訪ふ。天文臺では臺長デ・シター氏に挨拶した後、アメリカ以來の馴染のオールト君の案内で本館の室々、ツアリス製シラツファイア・カセツ式天體寫眞儀(四時)、六時子午環及びジュネヴ製自記測微器、十時赤道儀を見、更に天體物理館ではツヰア氏に熱電光度計及び十三時寫眞望遠鏡を見せられた。——古い天文臺ではあるが、近年更に組織を新たに、新建築を起し、新器械を備へ、新人物を養成して、將來の活躍を豫期してゐる様は美しい。

正午、別室で臺長夫妻及び南亞よりの珍客インネス博士と共に午餐(席上、自分はインネス氏から、南亞へ來遊することを大にすゝめられた。)

午後二時、インネス氏に見送られて、ライデン停車場より出發。半時間後アムステルダム着。ギクトリア・ホテルに入る。——アムステルダムへ來た自分の最大の要事は今日の中にドイツ領事の裏書を貰ふつもりであつたのだが、來て見れば、既にオフィス時間に遅れて、明

朝までは駄目、止むなく、市街を見物する。

十二月九日(火)

朝、魚の市場や、大學あたりを見た後、ドイツ領事館へ行つて、可なり面倒して、裏書を得、早速宿の拂ひをすまし、正午發の汽車にのる。

アメルスフオルストミツオルレミで乗りかへて、「白砂青松」と言つたやうな日本式の景色を見ながら、五時半クロニンゲン着。ホテルフリゲに入る。——夕食後、天文部のフアン・ライン教授に電話、それからグローテ・マルクトの廣場まで散歩した。一劇場で早川雪州の「海戦」を出してゐる。

十二月十日(水)

朝霧の深い中を、大學まで歩き、「カプタイン天文實驗所」と大きく書いた建物を見つけて、入口をさがして居るさ、所長フアン・ライン氏に見つけて貰つた。案内されて、氏の室に入り、暫く話した後、圖書室、立體比較器、熱電光度計、レプソルド製測定器を順に見た。——設備は單に之れだけ、望遠鏡の一つもない天文研究所である。しかし建物も意外に大きく、人員も亦意外に多く、可なりの材料を取り扱つてゐる大研究所である。

十時半、クロニンゲン發。まもなく獨逸國境に入り、エーネルで税關検査、三時アレーメンに着いた。

アレーメンでは、別に天文臺も無いので、只、昔の天文家オルバースが此所に居たのを偲び、市立劇場の前庭の岡の上にあるオルバース記念像を見るために足を運んだのに、冬期で、此の記念像は木の箱に掩はれてあつたので失望した。それから市街の目わきの場所を一通りあるき、再び停車場に戻つて、四時半發車。六時半ハムブルクに着フエニクス・ホテルに入る。

今日は朝から頗る寒い。

十二月十一日(木)

朝九時發の地方列車でベルゲドルフ村へ行き、それから半里ほどの道を人に聞き、十時頃漸く「ハムブルク天文臺」の門前に到着した

入つて案内を乞ふさ、程なく臺長シヨール教授に迎へられた。暫らく話した後、臺長は親しく自分を案内して、大きな圖書室を見せられ、そこで一九〇五年以來の多くの日食寫眞原版を見た。次でバーデ氏の室に通され、氏の新発見の遊星寫眞や、其の他、四十時反射鏡で撮られた多くの星雲寫眞を見せられた。次のシブスマン氏の室ではリベルト望遠鏡による多くの星團の寫眞を見た。

午餐は臺長宅で、臺長夫人の厚意による御馳走、席へ四人の子供たちも出て来て大賑はひであつた。——それから、又、臺長は二十四時大望遠鏡室へ案内せられ、新式の諸設備を一應運轉して説明せられた後、其の擔任のグラーフ氏に紹介された。グラーフ氏は最近の火星觀測の結果を多く見せられた。それから、七時半の午午環、四十時反射鏡、六時赤道儀、四時子午儀、リベルト寫眞望遠鏡など、あらゆる設備を一巡した。

此の日、寒氣殊に強く、雪のやうな霜が終日樹々を白くしてゐた。シヨール臺長が多忙の身を以つて特にくり合はせ、朝より夕刻に至るまで全日を割いて、親しく自分を迎へ、れざらひ、案内を説明さ、至らざるなき親切ぶりには大に敬服した。

午後五時半發で、一旦、ハムブルグに引き返し、急に思ひ付いて、オーデルベク街に老川氏を訪れ、可なり話した後、夜十一時發の汽車でベルリンに向ふ。

十二月十二日(金)

朝六時ベルリンのレールテル停車場に着。それから市内鐵道と地下線とに乗りついで、シエーネベルグの宿エリクセンに着いた時は、未だ夜が全く明け離れてゐなかつた。

朝食後、すぐ、ボツダムー停車場へ行き、十時發の地方列車でボツダムに行く。——ボツダムでは驛前で少々まごついたが、漸くテレグラフ丘を見つけ、天體物理觀測臺につき、臺長ルーテンドルフ教授に面會した。こゝでは三十一時大望遠鏡を始め、多くの器械的設備を見殊に所謂「アインシュタイン塔」は、未完成ではあつたけれど、鏡の据付方や、撮影裝置等の點に於いて見事なものであると見た。又、過去半

世紀來、フオゲル、シバルツシルド等の偉人たちが此所で研究したといふ思ひ出が自分には興味深かつた。——最後に、自宅に居られたミユラー老を訪れた。

午後、ベルリンに歸り、テイアガルテンあたりを散歩し、日本の大使館を訪れた。

十二月十三日(土)

朝、フリーデナウのカイザー・アレーにバムベルグ會社を訪れた。



塔ニイタシンイアの臺文天ムダツボ

此の會社は今はテツプエル會社とも合併して、獨逸に於ける有数の天文器械製造所であり、工場の屋上には十時程度の赤道儀を入れた天文臺を持つてゐる。自分の今日の用務は、目下此所で京都大學のために製作中の分光太陽寫眞儀を見ることであつて、幸ひテツプエル主人とも面會して其の用件は間もなくすみ、其の後一支配人に案内されて、大きな工場到る所盛んな活動ぶりを見た。

午後はフリーデナウ停車場から、西南のノイ・パベルスベルグへ行



臺天文學大ニリルベの村ケルベスルバ

き、丘の山に聳ゆるドームを目當にベルリン大學天文臺を訪問。グートニク臺長に迎へられ、二十五時大赤道儀、十六時寫眞望遠鏡、四十八時大反射鏡、七時半子午環、七時垂直環、及び九時赤道儀に附した光電光度計等を見せられ、五時には臺長宅でテイに招かれた。——ボツダムの天體物理觀測所の方で、何れ劣らず立派な構へなし、新しい設備をしてゐる。又、其の活氣に満ちた點に於いて、フランスの諸天文臺とは全く比較にならない。「之が戰敗後までもない國の天文臺か」と驚かされる。

十二月十四日(日)

朝からベルリンの目ぬきの場所あたり散歩に出かけ、ライプチヒ街とヘルヘルム街からウンテル・デン・リンデン通りに出で、クロンプリンツ宮にロダンの作品などを見、舊新の兩美術館及びナチヨナル美術館を見、午後、ホエルスから汽車でトレプトウに移り、アーヘンホルト博士の經營するトレプトー天文臺を訪ふた。生憎、アーヘンホルト博士は病氣で面會は出来なかつたけれど、一助手に導かれて、有名な二十七時の野天望遠鏡其の他を見、此の珍らしい通俗教育天文臺の活躍ぶりを一通り知ることが出来た。

十二月十五日(月)

今日はベルリンの街々をあるいて、買ひ物などした。連日、非常な寒さには全く驚いた。主な天文臺の訪問を終つた今、もはや大した用事もないので、パリへ歸ることを決め、夜八時、シレジャール停車場の急行にのる。

十二月十六日(火)

朝六時半ケルンに着。暫く市街を散歩したり、電信局へ行つたりした後、七時(パリ時刻)發。九時頃、アーヘンに下車して、少時散歩した。あとは乗りつゞけ、リエージュ、ナミュル、シャールローを通過、午後五時半パリ北停車場に着。宅へついて英子に迎へられたのは六時過ぎであつた。

十二月十七日(水)

パリへ歸つて見るに蘭獨あたりよりは、驚くほど暖かい。今日は久

しふりで英子とエトワール附近、又、轉じてオペラ街あたりを散歩す。
十二月十八日(木)

朝十時、兩人でグランパレーの飛行機展覽會を見た。飛行術に最も得意なフランスの豪勢ぶりは羨しく感じた。

午後、ルーヴル美術館で中世の繪畫を見る。

十二月十九日(金)

かれてから思つて居たノートルダム塔の上へ、英子と二人で登つて見た。昨夜、ユーゴー作ノートルダム塔の活動寫眞を見たのが動機となつたわけなのだが、霧が多少空中にあつたため、遠方の景色はよく見えなかつた。

十二月二十日(土)

自分等は一月末の鹿島丸で歸朝する筈であるが、尙、暫く時日があるので、今暫くパリに滞在するさきめ、自分は今後毎日パリ天文臺へ行つて圖書室で讀書したいさう希望を、今日、天文臺の若いマヨール氏に頼んだ。

英子は英子で、時々、武林夫人方へ帽子の作り方を教はりに行く。

十二月二十一日(日)

朝、散歩して、近くのパンテオンを見に行つた。新しく祭り込まれたジヨレーの像もあつた。シヤザンヌの畫も面白かつた。

午後は、もつと近いクルニー美術館を見る。外觀に似合はず、内容の夥しいのに驚いた。こゝに一五〇二年の銘をうつた天球儀があつたが、琴座に LYRA さまもな名が書いてありながら其所には鷺の畫が描いてあつたのは面白かつた。全く古いものゝ證據だ。

十二月二十二日(月)

今日から、いよいよ午前中パリ天文臺の圖書室へ通つて、讀書する此の日、ナハリヒテン誌で見た所によるミ、夏頃自分がハーブードで餘暇に研究した新變光星(グラフ氏発見一九二四・二四)は白鳥座 CH 星といふ名が附せられた。

夜、兩人で、始めてオペラを見に行く。題はアナトール・フランスの作つた「マイス」で、筋をかねてから知つて居たものだから、演技は

好く了解でき、愉快であつた。

十二月二十三日(火)

午前中は天文臺。——どうも獨逸系統の雜誌が充分に来てゐない。日和が好いので、午後は兩人でエトワールの凱旋門へ上り、景色を見た後、トロカデロからシヤン・デ・マルスまで散歩した。

ムードン天文臺のテランドル臺長より來書。

十二月二十四日(水)

午前中は天文臺。——午後三時からはフランス學院内の經度局へ行き、恰も例會のため集つて來た委員たちの中にムードンのテランドル臺長を見つけ、ごく暫く話した。明後日その天文臺を訪れる筈。

いよいよクリスマスが迫つて來て、四五日前からパリの街々は外觀が一變した。米國で見たやうな飾りつけのクリスマス・トリーは何所にも見當らないが、總ての店の店飾りは美しい贈り物で一ぱい、殊に又、人通りの多い街々の歩道には鐵引きの露店などが夥しく並んで、夜の散歩客を引きつける。自分等も、今日は七面鳥の代りにローストチキンを一疋買つて來て、晚餐の食卓を賑はし、夜は九時過ぎからイタリヤ、モンマルトルの街々を散歩した。

○九月號の訂正事項

頁	行	數	誤	正
347	掩蔽の標		Castellon	Constellation
352	25 番 目		Cen	CyB
々	31 々		Ap	Apl
々	33 々		みつかめ	みつかめ
353	長週變期光星 W Peg		23h 41m	23h 14m